

【使徒書日課】コリントの信徒への手紙二 6章1～10節

¹わたしたちはまた、神の協力者としてあなたがたに勧めます。神からいただいた恵みを無駄にはいきません。²なぜなら、

「恵みの時に、わたしはあなたの願いを聞き入れた。

救いの日に、わたしはあなたを助けた」

と神は言っておられるからです。今や、恵みの時、今こそ、救いの日。³わたしたちはこの奉仕の務めが非難されないように、どんな事にも人に罪の機会を与えず、⁴あらゆる場合に神に仕える者としてその実を示しています。大いなる忍耐をもって、苦難、欠乏、行き詰まり、⁵鞭打ち、監禁、暴動、労苦、不眠、飢餓においても、⁶純真、知識、寛容、親切、聖霊、偽りのない愛、⁷真理の言葉、神の力によってそうしています。左右の手に義の武器を持ち、⁸栄誉を受けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びるときも、好評を博するときにもそうしているのです。わたしたちは人を欺いているようでいて、誠実であり、⁹人に知られていないようでいて、よく知られ、死にかかっているようで、このように生きており、罰せられているようで、殺されてはならず、¹⁰悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのように、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています。

【福音書日課】マルコによる福音書 9章14～29節

¹⁴一同がほかの弟子たちのところに来てみると、彼らは大勢の群衆に取り囲まれて、律法学者たちと議論していた。¹⁵群衆は皆、イエスを見つけて非常に驚き、駆け寄って来て挨拶した。¹⁶イエスが、「何を議論しているのか」とお尋ねになると、¹⁷群衆の中のある者が答えた。「先生、息子をおそばに連れて参りました。この子は霊に取りつかれて、ものが言えません。¹⁸霊がこの子に取りつくと、所かまわず地面に引き倒すのです。すると、この子は口から泡を出し、歯ぎしりして体をこわばらせてしまいます。この霊を追い出してくださるようにお弟子たちに申しましたが、できませんでした。」¹⁹イエスはお答えになった。「なんと信仰のない時代なのか。いつまでわたしはあなたがたと共にいられようか。いつまで、あなたがたに我慢しなければならないのか。その子をわたしのところに連れて来なさい。」²⁰人々は息子をイエスのところに連れて来た。霊は、イエスを見ると、すぐにその子を引きつけさせた。その子は地面に倒れ、転び回って泡を吹いた。²¹イエスは父親に、「このようになったのは、いつごろからか」とお尋ねになった。父親は言った。「幼い時からです。²²霊は息子を殺そうとして、もう何度も火の中や水の中に投げ込みました。おできになるなら、わたしどもを憐れ

んでお助けください。」²³イエスは言われた。「『できれば』と言うか。信じる者には何でもできる。」²⁴その子の父親はすぐに叫んだ。「信じます。信仰のないわたしをお助けください。」²⁵イエスは、群衆が走り寄って来るのを見ると、汚れた霊をお叱りになった。「ものも言わせず、耳も聞こえさせない霊、わたしの命令だ。この子から出て行け。二度とこの子の中に入るな。」²⁶すると、霊は叫び声をあげ、ひどく引きつけさせて出て行った。その子は死んだようになったので、多くの者が、「死んでしまった」と言った。²⁷しかし、イエスが手を取って起こされると、立ち上がった。²⁸イエスが家の中に入られると、弟子たちはひそかに、「なぜ、わたしたちはあの霊を追い出せなかったのでしょうか」と尋ねた。²⁹イエスは、「この種のものは、祈りによらなければ決して追い出すことはできないのだ」と言われた。

「何でもできる」【こども説教のために】

わたしたちは、目には見えないけれども導いてくださる主イエスと共に、神の御前に進み出て礼拝をささげる者とならせていただいています。

主イエスが三人の弟子たちだけを連れて高い山に登られたことがありました。そのとき共に山に登ることを許されずに残された弟子たちは、主イエスが見える姿で共にいてくださらなくても、なお共にいてくださることを信じて生きていくための練習をさせていただいていたのかもしれませんが、ところが、うまくいかないことがありました。悪霊に取りつかれた一人の子どもを癒すことができなかったのです。その子の父親が弟子たちに願いましたが、弟子たちには、できませんでした。ようやく弟子たちのもとに帰って来られた主イエスが、その子を癒してくださったのです。弟子たちは、なぜ自分たちにはできなかったのか、主イエスに尋ねました。主イエスは、「**祈りによらなければ…できない**」とおっしゃいました。

主イエスが弟子たちにおっしゃった「**祈り**」とは、癒しを願う父親が、「**信じる者**」になることができるようにと願うことだったのでしょう。主イエスは、子の癒しを願う父親と対話をされて、その父親から「**信じます**」という言葉を引き出しました。父親は、信じていなかったのです。自分には信仰がないと思っていたのです。それでも、「**信じます**」と言いました。「**信仰のないわたしをお助けください**」と叫びました。主イエスの言葉に促されて、目の前にいるお方を信じてみよう、と飛び込んだのです。その子は、主イエスの御言葉によって癒されました。悪霊が出て行き、一度は**死んだよう**になりましたが、**手を取って起こされると、立ち上がり**ました。その子は、父親のもとに返されたのです。そのとき、父親はようやく本当に信じることができたのではないのでしょうか、「**信じる者には何でもできる**」ということを。

「信じます」

先週月曜日、わたしたちの教会で共に歩んで来られた信仰の兄弟の一人 O 兄が、地上の生涯を終えられました。94 歳に十日足りない人生の月日でいっしょにいました。ご葬儀はご身内のみで密やかに執り行われましたが、金曜日には新聞などで訃報が報じられましたので、皆さんへのお知らせが後になってしまいました。O 兄は、二十代の終わりに洗礼を受けられ、ご夫妻で生涯にわたって、住まわれたそれぞれの地にある教会に連なって来られました。

わたしどもが石神井教会に着任した十年前には、まだ現役でお仕事をなさっていましたが、日曜日の礼拝生活を何よりも大切にさせていただきだけでなく、教会総会や全体懇談会、また祝会などにも欠かさず出席されていました。ここ数年は、毎週の礼拝出席が難しくなっていっしょにいましたが、それでも月に一度ないし二度は礼拝に出席され、おいでになれないときにはご自宅でオンラインの礼拝にあずかってくださっていらしたのです。

最後に礼拝に出席されたのは、2 月の最終日曜日でした。その日は午後、教会総会が予定されていました。礼拝においでになられた O 兄は、朝、総会の出席登録をされましたが、礼拝が終わると、そのままお帰りになられたのです。わたしの知る限り、礼拝においでになられたのに総会に出られずにお帰りになられるというのは、初めてのことでした。その後、O 兄は、体調を崩され入院療養入られました。そして先週、いよいよ主の御もとに呼ばれるときを迎えられたのです。

O 兄は、18 年前に逝去したわたしの亡父と一月違いの同年齢でしたので、わたしは、勝手に自分の父親を重ね合わせて見ているところがありました。O 兄に限らず、わたしは、こども時代から、教会の親世代の方々を、実の両親と共に「教会の父母たち」として与えられてきたという思いがあります。実の両親だけでなく、「教会の父母たち」に育てられ、教え諭され、助けられてきたのです。その「父母たち」から見て、「教会の子たち」の一人であるわたしは、もしかすると、いつも心配の絶えない「子」であったかもしれません。それでも生かされてきたのは、その「父母たち」が、「子」であるわたしのことを主イエスのもとへと連れ出し、祈りのうちに「信じる」と言い、共に歩むように働きかけてくれていたからなのでしょう。

その父親は、幼いときから悪霊に取りつかれ、手の施しようがない症状を見せていた息子連れて、主イエスのもとに進み出ました。父親は、その息子がいずれ何かの拍子に死んでしまうのではないかと恐れていたのです。これまで、息子を助けようとあらゆることをしてきたのでしょう。そして、そのたびに失望してきました。今度も失望したくない、との思いがあったかもしれません。「おできになるなら…お助けください」としか言えませんでした。

「祈りによらなければ」

実際、主イエスがいらっしゃる前に、弟子たちは、この父親の願いを聞きながら、応えることができなかったのです。父親を失望させていました。彼らは、なぜうまくいかなかったのか、分かりませんでした。彼らは、うまくできると考えていたのです。すでに二人一組になって宣教に遣わされたとき、悪霊を追い出す権能を主イエスから授けられ、実際に多くの悪霊を追い出し…病人をいやすという成功体験をしていました（マルコ 6:6~13）。

わたしたちはしばしば、成功体験に縛られて失敗します。確かに、自分の成功体験は、自信になります。他人の成功体験を聞いて、我が意を得たりと、一つの道に行く決心を与えられることもあります。けれども、成功体験は、得てしてわたしたちを頑なにするのです。他の選択肢を排除させてしまうのです。実際のところ、成功体験ではなく失敗体験こそが、わたしたちを自由にし、行くべき道を見いださせることも少なくないのではないのでしょうか。

弟子たちは、失敗しました。主イエスがそこに共にいらっしゃらなかったから失敗した、のではありません。立ち止まって、うまくできない原因に向き合うことをしなかったために、失敗したのです。

弟子たちは、あの父親とその息子のために、祈るべきでした。主イエスは、「この種のは、祈りによらなければ決して…できない」とおっしゃいました。主イエスは、何でもかんでも「祈りによらなければ」とはおっしゃいません。ただ、「祈りによらなければできない類のものがある」とおっしゃるのです。弟子たちが向き合うべきは、信じることができないでいる者でした。あの父親とその息子は、信じることができずにいたのです。神の御力を信じることができず、神を信じて御業のために仕えようとする者のことも信じることができないでいる者たちです。何よりも、自分の息子の行く末を信じられない父親、そして、自分の父親を信じて身を委ねることができない息子、なのです。互いに信じ合うことに失望してきた者たちです。そのような者たちのために、弟子たちは、祈るべきでした。

主イエスは、祈られたのでしょうか。祈りをもってあの父親に向き合い、その息子に向き合われたのでしょうか。彼らが信じる者になることを願って、神に祈られたのでしょうか。故郷ナザレで親戚や家族の不信仰を驚かれた（マルコ 6:1~6）主イエスは、人が互いに信じる者になるために、何が必要なのか、深くお考えになられていらしたはずです。

まず神が、ご自分の働きを共に担う者を、子として信じてくださっているのです。その御父と祈りを通して信じ合う交わりに留まるならば、わたしたちは、一人の人が信じる者にされるようにと、祈るのです。わたしたち自身が、その一人の人を信じる者となることができるようにと、祈るのです。